

Title	匏船(西村眞次著, 造船協會發行)
Sub Title	Shinji Nishimura, The Hisago-bune or Calabash boat
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.1 (1935. 4) ,p.170- 171
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350400-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

Shinji Nishimura, The Hisago-bune or
Galabash Boat

匏 船 (西村眞次著)
造船協會發行

今から十七年前に出版した同氏の匏船考を今一度書き改めて世に問はれしもの、日本古代船舶研究第二冊、第一部浮揚具第一編である。古代に於ける船舶の状態が如何なるものであつたかは考古學の解明によらざる限り、其の最も原始的の形態を窺ふことは難しからう。著者は古代日本の水上渡過が先づ匏を浮揚具として行はれた事を神話學的、言語學的、土俗學的、考古學的等の諸調査から論證しようとする。通讀して著者が多種多様の資料を蒐集せることに對し驚かざるを得ない。その中にも濟州島の海女の瓠を浮揚具とせる状態の珍しき寫眞などを示されたことに對しては衷心から感謝しなければならぬ。瓠の問題は東亞の歴史を論ずる場合必要缺くべからざるものであり、教授が此の至難なる主題の解決に敢然向はれし勇氣に對しては何人も讚嘆を禁じ得ないであらう。著者の譯された三國史記新羅の神話中の瓠公の物語は瓠の歴史に重要な資料であり、また著者が市島氏より聞いた熊本の武士の水泳術の秘法は帶に浮揚具を縫ひつけることであつたと云ふこ

とを古代人が瓠を腰につけて泳いだ名残りとして紹介してゐるなどは興味ある。もし著者がかういふ資料のみを示し、讀者が推論を待たずして自然に納得する様な方法を取つて呉れたなら問題ないのであるが、著者があまりに博學すぎ、多種多様な材料を擧げ過ぎてその間に聯絡を強ひてつけようとせられるのでその中には吾人と意見の相違ある見解にまゝ接するのは遺憾である。

然し同氏の意見に對し異説を述べんがためには、同氏の祖述される鳥居博士の日本人種論や、また英國學派の文化移動説に對し批評しなければなるまい。然し此處にはその餘白もなし、且つかういふ問題は實の所誰か鳥の雌雄を知らんと云ふべき難問であるので今日論及することを省く。讀過して氣付いた點を若干擧ぐれば四十二頁に著者は安南の漢字音が日本語に似てをることから日本語に安南の要素があると述べてをられるが安南漢字音は唐代の字音を保存せるもので同じ頃に漢字音を多量輸入した日本と其の點で相似せるのではなからうか。著者は漢字音の古形を知るに安南音にたよつてをられるが此の點はカールグレンの字書や詩經の押韻による古形の再建方法によられる方がより妥當であらう。三十三頁に南支那の古代住民が印度支那に入り今日の印度支那民族となり、その一部が九州の北と西に殖民して倭人となつたと述べられてをるが今日の印度支那居住民族はモン・クメル、タイ、チャイニースと呼んでしまふのはどうかと思はれる。その中の一支族が日本に來たにしてもそれがタイ族であつたか苗族であつたかさては崑崙人であつたかいろいろの疑問が生ずる。著者の様に簡

單に斷案を下してしまはずに今少し精密に系統を定めていたゞきたい。十八頁から廿二頁までにわたり著者は神功紀の記事を論じ、眞木灰納瓠と云ふ文句は實は槓の木の舟に瓠を浮揚具として結びつけるものであらうと推定されてをるが、かういふ神話的所傳の解釋に著者の意見は少し合理的に過ぎる嫌ひはあるまいか。瓠が水の神と關聯してゐた傳承を顧ると矢張り此の條の解釋は海上を平穩ならしむるための呪術的行爲として説く方が安全ではなからうか。著者は灰を舟に對する古音となしへサキのへを仲介となし、朝鮮語 *Pai* と結びつけようとされてをるが一體舟の名前には *p* と *ka* とかのついた水上に物の浮く狀を示す擬聲詞的の要素あり、支那でも江南地方で舟のことを船などと呼んでをる。日本の舟の古語を朝鮮語だけに結びつけるのはどうかと思はれる。

以上いろく私見を述べたが西村教授が獨力此の古代船舶研究の難問題に従事し、種々珍奇な材料を提供され、吾人を啓發して呉れる功績は感激に堪へぬ所であり、將來益々此の方面の開拓に従事せられんことを期待する(松本信廣)。

André Gayot, François Guizot et Madame

Laure de Gasparin (1830—1864), Paris.

歴史家であつたギゾーは、同時に政治家でもあつた。一八四八年の二月革命によつて、政治家としては失脚したが、幸ひ彼の歴史に對する深い理解が、後世の史學研究者に幾多の有益な材料を遺してゐる。

彼は二月革命に追はれて、一年餘の間イギリスに亡命してゐた

が、翌年の夏には歸國して、Val-Richer のシャトーに立籠り、筆をとつて餘生を過した。第十九世紀外交史の研究に缺くべからざる材料である彼の *Mémoires pour servir à l'histoire de mon temps*, 9 vol. も、その間の成果である。

ギゾーには、故郷ニーム時代からの親友があつた。親友の妹 Laure (1790—1864) は、一八一三年嫁いで *Cécilia* 夫人となつたが、ギゾーは、彼女が死去するまで文通を續けた。

ギゾーから彼女に送つた書簡四百五十通を年代順に配列し、之に目次と索引を附したのが本書である。一八三〇年から一八六四年までの三十五年間に於けるギゾーの學究的生活、政治家的轉變が、これによつて窺はれ、特に隱遁後の部分によつて、ナポレオン三世の治世に對する彼の客觀的觀察を知ることが出來、興味は盡きない。

但し彼が政府の首腦者であつた時代の分でも、重大事件が勃發した時には、私信を認める餘裕がなかつたのか、或は書簡が残つたにしても本書出版に際し、その部分を除いたか兎に角、かへつて數は少くなつてゐるから、史上のデイトに従つて、本書を繰つても失望することがある。この點は、恰も同時代の *The Letters of Queen Victoria* に到底及ばない。蓋し私書集であれば、己むを得ぬ缺陷でもあらう。

然し乍ら、數々の書簡を綿密に吟味することによつて、凡ゆる角度からギゾーとその時代を再認識することが出來よう。ギゾーの書簡集としては、以前にも *Letters à sa famille et à ses amis*, Paris, 1884. 等があるが、表題の書は勿論未發表のものば